

平成30年度 大洗学講座『磯節』
～唄い継がれてきた、その歴史と伝承～

第Ⅲ部
磯節の成立と展開について

文化財保護審議会委員
加倉井 東
(茨城中学校・高等学校 国語科教諭)

はじめに

1. 演題を「磯節」の諸相」と読み替える。
2. 磯節の「展開」はわかるが、磯節の「成立」がわからない。

(1) 2

「磯節論争」を知っていますか？

昭和38年から昭和40年(1963～65)にかけて、水戸の雑誌『週刊てんおん』誌上で断続的に行われた「磯節の発生」を中心課題とする論争。

江戸期の資料が確認できず、確たることが言えなかった。

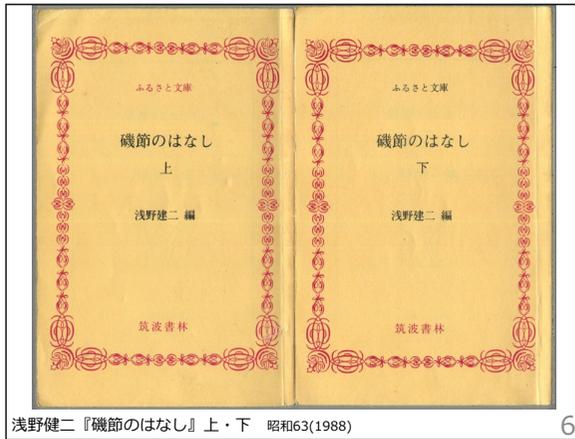
3



『週刊てんおん』428号p.10 昭和38(1963)/03/17

磯節についての考察 (一)
湯浅 五郎

現代の民俗学が全国的に盛んになり、この間に私達郷土の磯節が、其の故郷に於いては、大衆に親しまれるようになったこと、知らず、名勝大洗の名に因りて、中頃に大洗の磯節が、大洗の磯節として、天下の民間に伝はるることは、昔から喜ばしい事である。大洗の磯節が、大洗の磯節として、天下の民間に伝はるることは、昔から喜ばしい事である。大洗の磯節が、大洗の磯節として、天下の民間に伝はるることは、昔から喜ばしい事である。



基本的な立場

1. 歴史事実としての「磯節」を文献資料に基づいて記述する。(客観的な立場)
2. 磯節は元来三浜の俚謡(=さんびん りよう)だった。

*三浜…大洗・那珂湊・平磯の3つの海浜地区の総称

7

「磯節」の諸相(様々な姿)

I 「磯節」の歴史

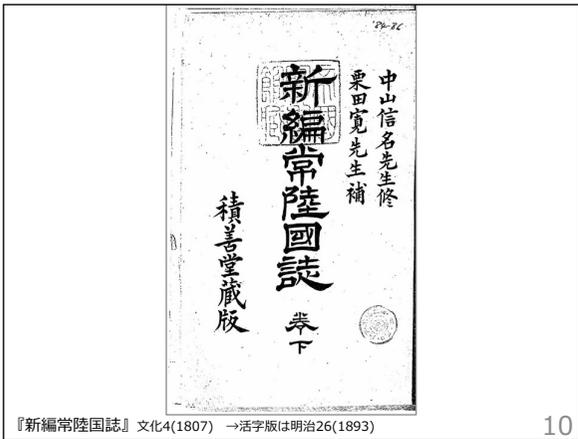
II 「磯節」の魅力

8

(2)資料の現状

江戸時代の資料は確認されていない。

9



『新編常陸国誌』文化4(1807) →活字版は明治26(1893)

鹿島郡磯村ニモ、娼家アリ、コノヲ岩井町ト云、
 岩井町ト云、妓ヲタクハへ客ヲ迎フ、
 コノ地那珂湊ニ對ヘル地ニテ、船舶
 輻湊ノ地ナルヲ以テ、一ノ都會ヲナ
 ス、コノ地ニモ、三弦ニ合スル端歌
 一曲アリ、岩井町曲ト云、

化セリ、鹿島郡磯村ニモ、娼家アリ、コノヲ岩井町ト云、
 妓ヲタクハへ客ヲ迎フ、コノ地那珂湊ニ對ヘル地ニテ、
 船舶輻湊ノ地ナルヲ以テ、一ノ都會ヲナス、コノ地ニモ、
 三弦ニ合スル端歌一曲アリ、岩井町曲ト云、コレモ歌ノ
 初句ニハ、必サマヨト云コトアリ、様ノ意ナリ、然レド
 モ他邦ノコレヲ知ルノ希ニシテ、潮來曲ノ如クナラ
 ズ、

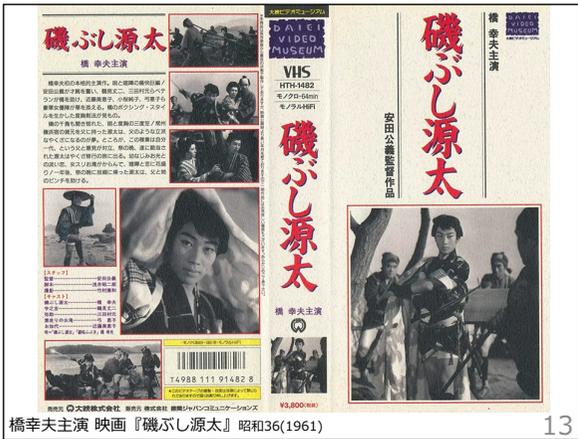
△サマヨ節であり磯節ではない

『新編常陸国誌』岩井町曲（風俗/潮來曲の項）

しかしこの歌調歌詞の発生が、水戸烈公に縁のあることは間違いないと思います。大洗町祝町の願入寺で発見された古文書の一部に「安政年間にいそぶしの事より博徒仲間にて争いを生じ、これが水戸侯の怒りにふれ遊廓中、三軒に営業停止を命じた」旨したためであつたものが発見されたのを見ると、

△資料の実物が確認できない

谷井法童『茨城の民謡を語る』昭和38(1963)/11/25



橋幸夫主演 映画『磯ぶし源太』昭和36(1961)

皇帝 漢書 帝紀 孝宣皇帝 本紀 帝紀 孝宣皇帝 本紀

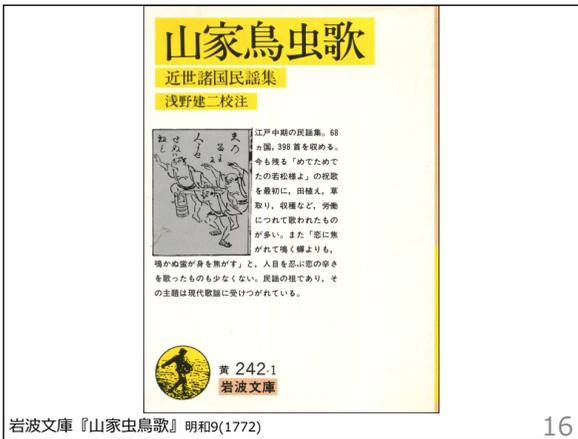
やんれ目出度、天の若クハ明く礼小月也
 所々名しをふ、影を畫し、三ツ又や浪も
 許小舟指し、操行く方志ハ駒形也誰
 ぞ真乳の山續き見れば心も陽陽川、流れ
 浮七一葉の舟の昔ハ唐土乃隻狄と云、兵
 け文武二道の達者なり、巧る時度、まき出

皇帝より『御舟唄』1700年代

とんとぶし
 むこう通るは清十郎じゃやないか、と
 んとへ、かさがよく似た菅笠が、と
 んとへ
 笠が似たとて清十郎であらへ、とん
 とへ、お伊勢参りはみな清十郎
 水戸で名所は千波の川よ、とんとへ
 蓮のめこめに鴨がすむ、とんとへさ
 まにありとてとんとへ、朝水くれば
 水は七桶また逢えぬ、とんとへさま
 さまに貰つたとんとへ絹糸の手まり
 とんとへつければ心もきみうきこころ
 とんとへ
 さまが来ぬとて、とんとへ、まぐら
 をなげて、とんとへ、なげたまぐら
 にとがわな、とんとへ

△囃子や内容から見て磯節ではない

『とんとぶし』『週刊てんおん』398号p.9 昭和37(1962)/08/19



岩波文庫『山家虫鳥歌』明和9(1772)

水戸で名所は千波の川よ
 蓮のめぐめに鴨が住む
 サツサ オセ〜

△「潮來節」の古謡かとされる。
 磯節ではない

『山家虫鳥歌』p.110

小型のを地元ではモヤンコロというところから、水戸は仙台藩に比べて小藩だが、小藩から大藩を救助することを船にこっそり歌い込んだものなのでしょう。

これらの点を考えても、磯節は烈公時代に、公の「△資料がない」内意を受けて何とかが作詞作曲したものと思われ

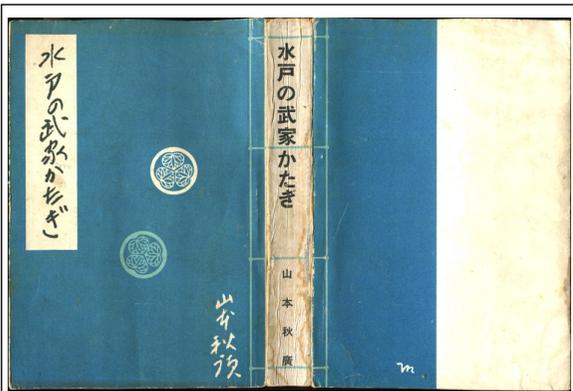
米を送つた。その米を送るときの船出の歌「三十五反の……」の歌詞が出来たと信じられる。

救護米を送るには千石船を用いた。(千石積みの船でなく、千石の木材を要する船を千石船といつたと言われる。)千石船に用いる帆布は普通18反、大ぶりの船で24反から28反で足りる。それが「三十五反の……」となつたのは、水戸が35万石領なので、水戸藩の心意気を表現したに外ならない。

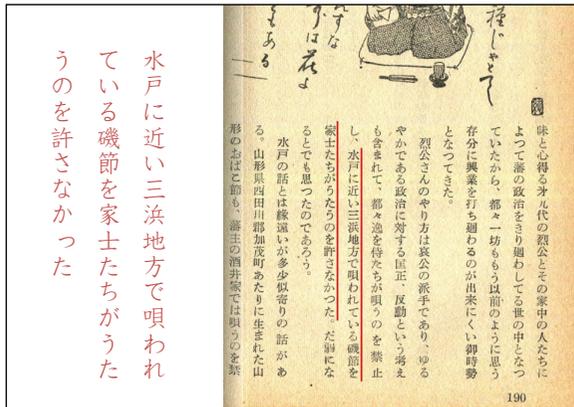
同じように、「船はチャンコロでも」は、漁船の

△資料がない

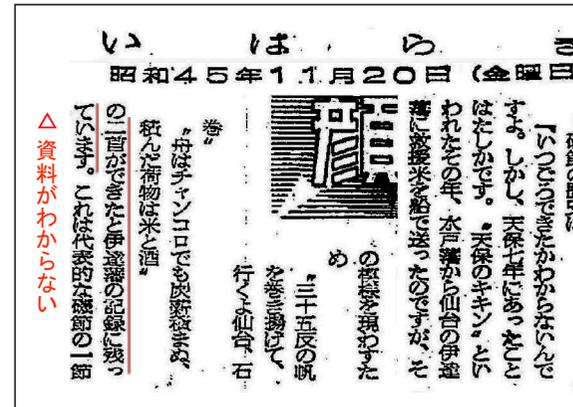
谷井法童『烈公時代に、公の内意を受けて』「35万石領」



山本秋広『水戸の武家かたぎ』昭和32(1957)



山本秋広『水戸の武家かたぎ』p.190



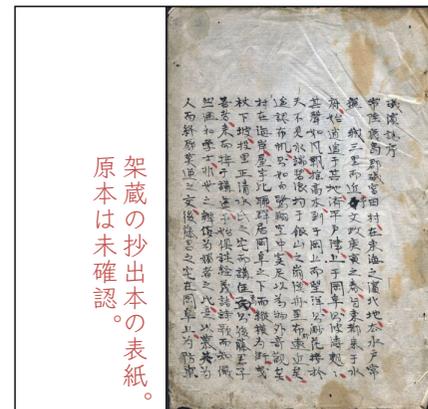
いはらき新聞 谷井法重 昭和45(1970) 11/20

(3) 江戸時代に資料がない理由
及び江戸時代にも存在したと言える理由

～ ① 俚謡としての磯節 ～

むしろ「無い」ことが、識字階級の歌でな
かったこと^{あかし}の証である。

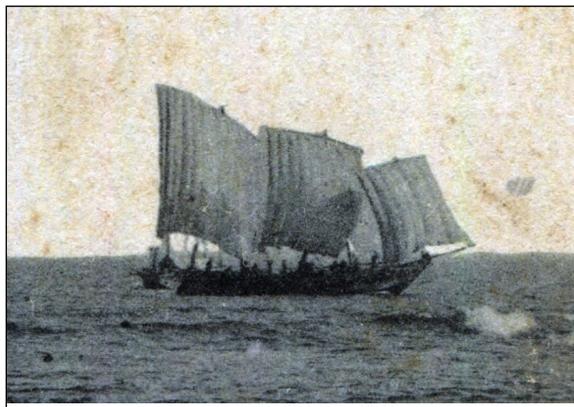
「磯節」という名称が唄の里を表している。
(=俚謡)



後藤子善『磯浜誌』天保6(1835) 上は架蔵の抄出本の表紙。原本は未確認。

三十五反の
帆を巻き上げて
行くよ仙台
石巻

磯節が江戸時代に存在したと言える理由1



絵葉書より 三本帆柱の船

磯節論争の始まり

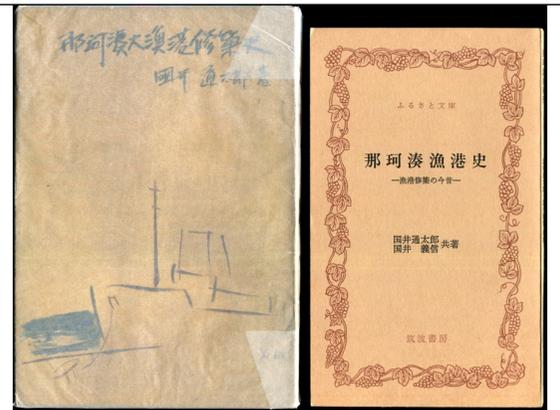
(湯浅五郎)

「祝町遊郭を軸として往古
の港村に出入りする多くの
廻船の船頭衆のもたらした
船唄がもとになって生まれ
たのであろう」

船はチャンコロでも
炭薪や積みぬ
積んだ荷物は
米と酒

磯節が江戸時代に存在したと言える理由2

28



国井通太郎『那珂湊大漁港修築史』『那珂湊漁港史』昭和30(1955)

29

奥州地方の諸大名及び商人は鹿島灘の危険をさけて、親船を仲港沖（那珂湊沖）に投錨し、ハシケ舟を以て河口に入り、涸沼川を経て涸沼対岸の海老沢に至り、ここより陸路鉾田にぬけて北浦より利根川、江戸川を通つて江戸へ輸送したのである。

舟はチャンコロでも炭薪積みぬ
積んだ荷物は米と酒

と磯ぶしに唄われたように、舟は小さいが仙台藩等の米や酒を積んで元氣一杯漕いで往復した繁栄振りが思われた。又下野地方からは那珂川を下つて木材、薪、炭等を輸送し来つて、その返り荷として海産物を積んで行く等、貨物の集散が盛んに行われた。

国井通太郎『那珂湊大漁港修築史』p.11より

30

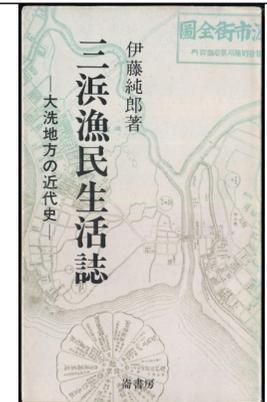
磯で咲く花
湊で散れて
落ちて流るゝ
祝町
(鹿島桜巷)

磯節が江戸時代に存在したと言える理由3

31

- ① 親船側の人もハシケ側の人も歌っている。
- ② 伴奏をする祝町側の女もほとんどが浜の女だった。
- ③ 漁業の唄も多い。
- ④ 「お薬師様よ」という異伝がある。
(明治18年(1885)
廃仏毀釈以前の名称)

32



伊藤純郎『三浜漁民生活誌』平成2(1990)

33

沖の暗いのに
苦とれ苦を
苦は濡れ苦
苦とれぬ

磯節が江戸時代に存在したと言える理由4

34



絵葉書 漁船の出航の様子

35

沖で鰹の
瀬の立つ時は
四寸厚みの
櫓が撓る
(しな)

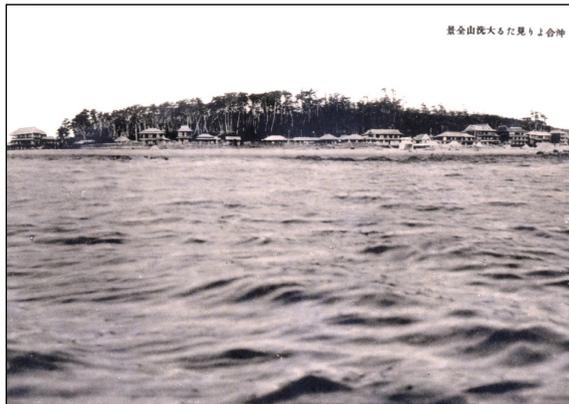
磯節が江戸時代に存在したと言える理由5

36

磯で名所は
大洗様よ
松が見えます
ほのぼのと

磯節が江戸時代に存在したと言える理由6

37



絵葉書 沖合より見たる大洗山全景

38

異伝(1898~1902)

- a 磯で名所は大洗様よ松が見えますほのぼのと
- b 磯は恋しやおあらい様よまつがみえますほのぼのと
- c 磯でこひしは大洗さまよまつがみえますほのぼのと
- d 磯が恋しや大洗様の松が見えますほのぼのと
- e 磯で名所はお薬師さまよ松が見え升ほのぼのと

39



神磯の碑 昭和31(1956)『日本文徳実録』(857年)の記述がある。

40

「薬師菩薩明神」

『日本文徳実録』天安元年(857)

「常陸国鹿嶋郡

大洗磯前薬師菩薩明神神社」

『延喜式神名帳』延長5年(927)

41

結論:

歌詞から考えて

磯節は旧幕時代から

三浜地区に

俚謡として存在した。

42

(4) 文献上最古の「磯節」?

漁夫ノ里謡ニ
シテモサセテモ孕マヌ奴ハ
マラノ泥棒 フンジバレ

漁夫ノ里謡
磯ノ浜邊ノ里謡
漁夫ノ里謡
磯ノ浜邊ノ里謡
漁夫ノ里謡
磯ノ浜邊ノ里謡

ガ
ラ
ワ
シ
ダ
ン
ベ
ネ
シ
ダ
シ
ガ
イ

漁夫ノ里謡
磯ノ浜邊ノ里謡
漁夫ノ里謡
磯ノ浜邊ノ里謡
漁夫ノ里謡
磯ノ浜邊ノ里謡

古渡理平『浜衛録』明治19(1886)内務省地理局地誌課の依頼で編纂された磯浜の地誌

43

『浜衛録』の唄からわかること

『浜衛録』の成立は明治19年(1886)。

「里謡」とあるが、磯浜の「里謡」は「磯節」としか考えられない。明治20年代に始まる磯節流行以前の、現在確認されている中で最古の「磯節」と見られる。

二首とも遊郭の唄ではない。笑いを伴う漁師の狼狽な生活歌・労働歌だった、と見られる。

44

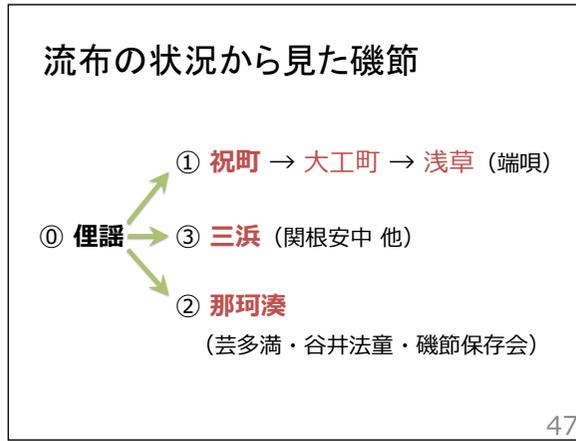
(5) 論者の行った作業

レジュメの資料参照(1~10)

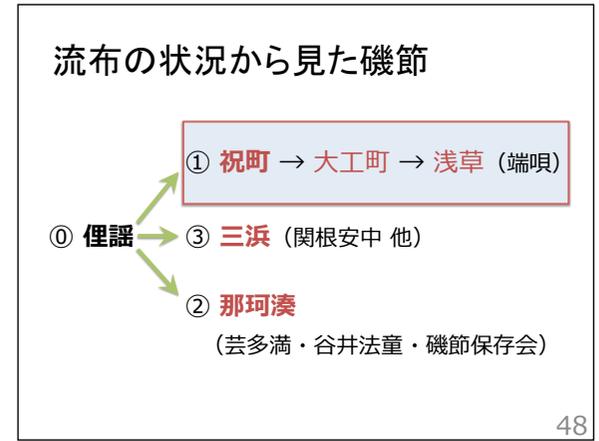
45



暮鳥会会報『雲』第22号 平成29(2017)・第23号 平成30(2018) 46



47



48

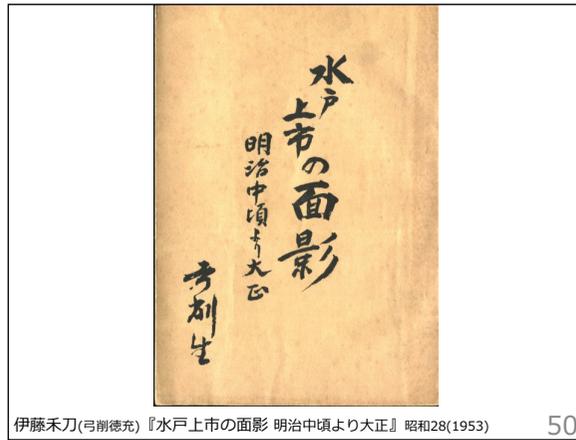
(6) 磯節の実態1

～ ① 流行歌としての磯節 ～

明治20～30年代

祝町 → 大工町 → 浅草 (端唄)

49



伊藤禾刀(弓削徳充)『水戸上市の面影 明治中頃より大正』昭和28(1953) 50

明治二十年代、『朝野新聞』の主筆でのち帰郷し稲敷郡の代議士になった川村惇が大洗に遊び、祝町から芸者を呼んだ時、磯節を聞いた。これが流布の始まりで、川村から水戸の長老大関俊徳を介して大工町にもたらされた。

伊藤禾刀『水戸上市の面影 明治中頃より大正』p.125

51



竹楽房・渡辺精作(1845-1920) 52



大洗磯前神社の絵馬 明治28(1895) 53

水戸を離れて
東へ三里
波の花散る
大洗

花門恋夢 (はなのとれんむ・河合政善) 作

54

初期の流布への貢献
～芸者と記者～

芸者 = 三味線による伴奏

記者 = 作詞 (漢詩と同じ起承転結の構造)

55

大 波 東 水
洗 の へ 戸
花 三 を
散 里 離
る 散 れ
て
結 転 承 起

磯節の構造

56



『俚謡正調』第一集・第二集 明治38(1905) 幕末・明治の俗謡は7775

57



自由民権運動期に流行した壮士演歌が明治22年(1889)2月の明治憲法発布で一段落し他時期に「諸国の地方唄が殆ど一時に勃興し」た→明治27～28年の都会における民謡の流行→国民国家の形成期に「想像の共同体」(アンダーソン)の拠り所の一つとして都会で「民謡」が流行するのは世界的な現象。「磯節」は日本での先駆け。

川上音二郎

58

① 流行歌としての磯節 の特徴

1. 構造 馬鹿騒ぎの後囃子を持つ
2. 本歌 早く穏やかな節
3. 内容 遊廓の色恋を歌う裏唄が多い

59

青菜の性(しょう)ならしほれて来い、
芸者の性なら褻とつて来い、
お客の性なら毎晩来い、
いち日逢はなきや阿父つあんも心配
お母さんも心配、ともに私も、イソ御心配

D 後囃子

60



唄本1～3

61



唄本1 (木版本)

62

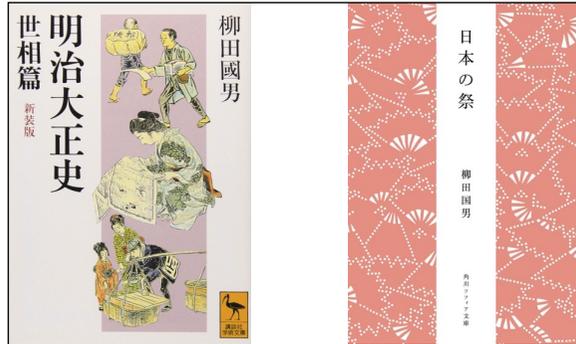


幕末の唄本の例1 都々逸、大都会(おおつえ)節

63



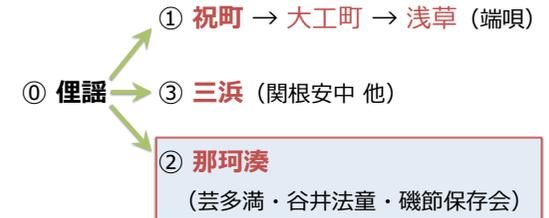
幕末の唄本の例2 とっちりとん、ちよいとぶし



鉄道網の発達・都会へのムラ人の集中赤の他人と明日からでも一緒に行動しなければならぬ⇒酒・唄・踊・喧嘩・祭というムラの機能を使った人間関係形成⇒馬鹿囃子

柳田國男『明治大正史 世相編』昭和6(1931) 『日本の祭』昭和17(1942) 65

流布の状況から見た磯節



(7) 磯節の実態2

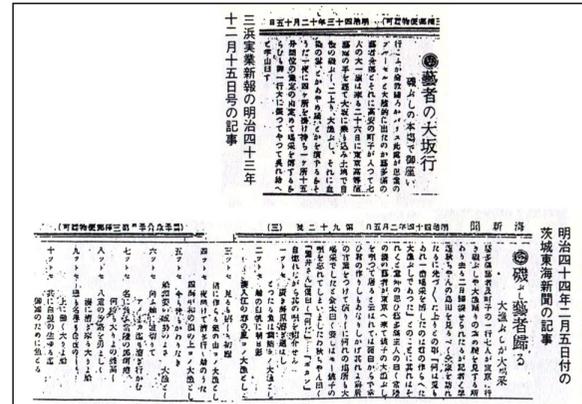
～ ② 芸術としての磯節 ～

明治40年代・矢吹萬助・芸多満

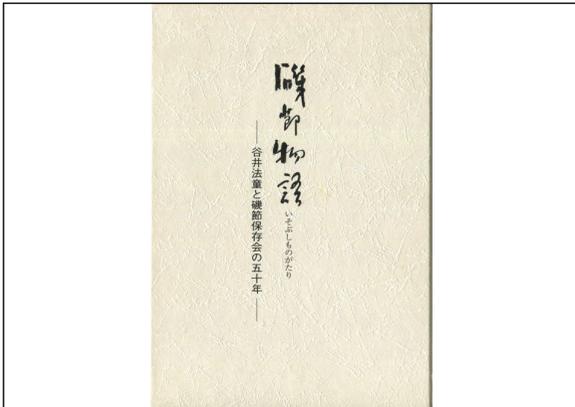
那珂湊 (芸多満・谷井法童・磯節保存会)



芸多満の芸者衆と稲古本 大正7(1918) 68



磯ぶし芸者の新聞記事 明治43(1910)、明治44(1911) 69



磯節保存会『磯節物語』平成10(1998)

「明治四十三年になって萬助氏が自家の娘金太を相手に磯節に三味線をつけた。ここに本当の座敷歌となったのです」

谷井法童「英城の民謡を語る(四)」『観光英城』111号 昭和38(1963) 71

② 芸術としての磯節 の特徴

1. 本場意識 ①の俗謡に対する抵抗
2. 音楽的な洗練
洗練された穏やかな節、三味線・尺八による伴奏
3. 構造 後囃子を外し本歌中心
4. 内容 本場の唄中心
5. 谷井を通じて保存会へ

流布の状況から見た磯節



73

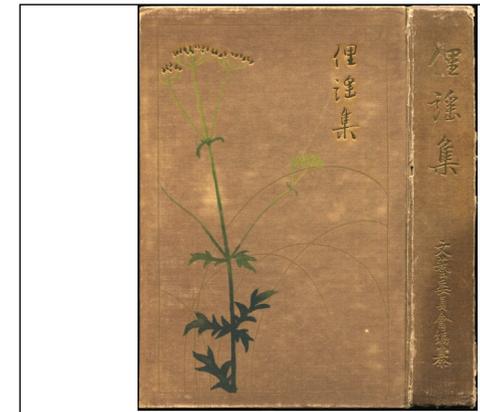
(8) 磯節の実態3

～ ③ 民謡としての磯節 ～

大正期・関根安中

三浜 (関根安中 他)

74



『俚謡集』文部省 大正3(1914)

75



『俚謡集』では採録しなかった「一般のもの及び男女間の愛情に渡る唄」の採用

六合館
「六合」
= 「くに」 = 「国」

『俚謡集拾遺』六合館 大正4(1915)

76

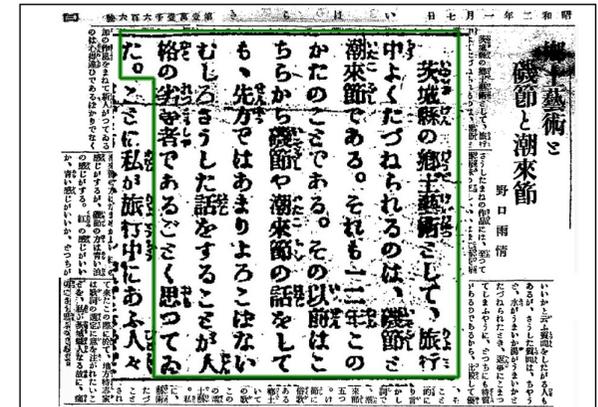
国家による「民謡」の評価

標準語教育の材料

⇒ 「俗謡」から「民謡」への格上げ

⇒ 「俚謡」評価の一変

77



野口雨情「郷土芸術と磯節と潮来節」いはらき新聞 昭和2(1927)/1/7

78



関根安中 東京放送局での磯節ラジオ放送記念での写真 大正14(1925) 11/19

79



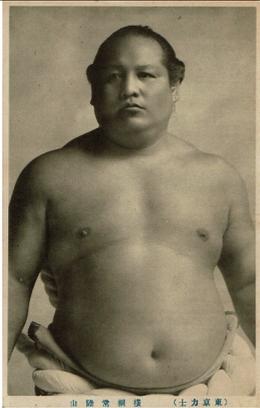
錦絵 常陸山 明治32(1899)

80



絵葉書 横綱常陸山

81



絵葉書 横綱常陸山

安中の磯節の特徴

1. **粗野・素朴**
2. **作詞作曲** 自由
3. **素唄** 無伴奏・膝拍子
4. **構成** 甚句を持つものがある
5. **内容** 地元の唄中心

私の磯節
東の果てよ
銚子外れで
水戸もない
(見ともない)
調子外れで
大洗 (大笑い)

安中作の磯節

わたしに会ひたけりや
音に聞こえし大洗下の
大きな石をかき分けて
小さな石をかき分けて
そのまた小砂利を紙に包んで
三尺小窓の小障子の陰から
ぱらりぱらりと投げしやんせ
その時や私が推量して雨が降ってきたと
イソ会ひに出る

E 安中の字余り磯節 (大洗甚句)

(9) 磯節の実態4

～ ④ 創作磯節と磯節の活用 ～

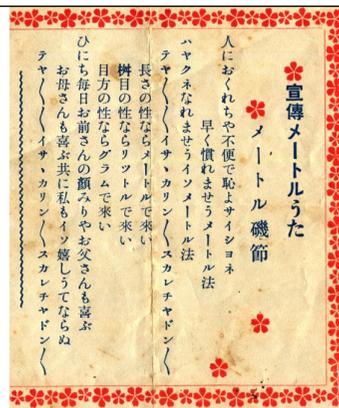
「資料6 作られた磯節」参照



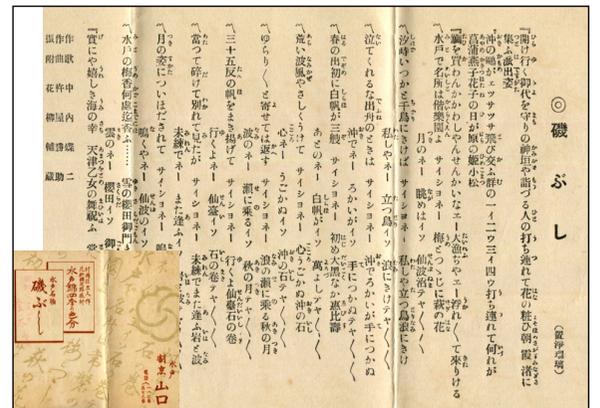
『ジョンペラの屍』 学生磯ぶし 大正8(1933)



『民謡新作集大東亜版』 昭和18(1943)



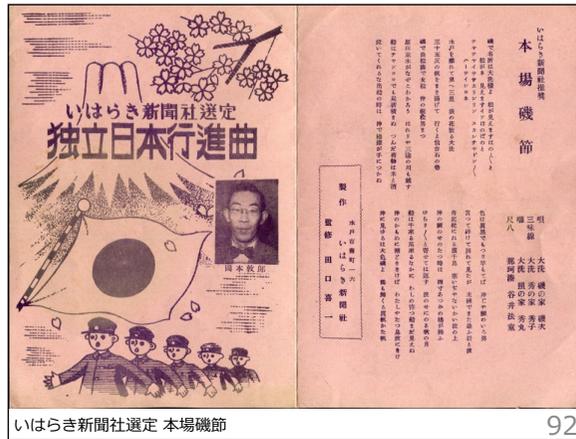
メートル磯節 大正10(1921)



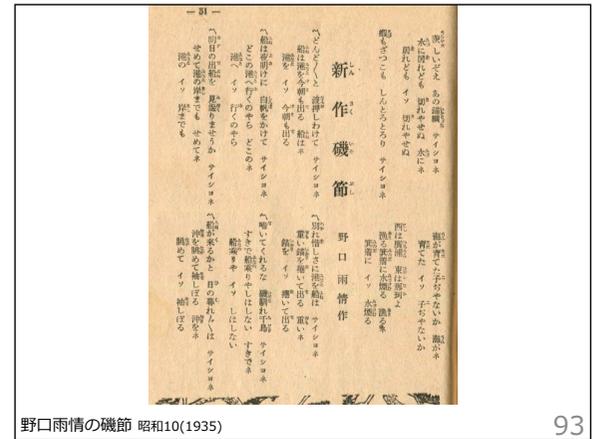
山口楼 水戸名物磯ぶし



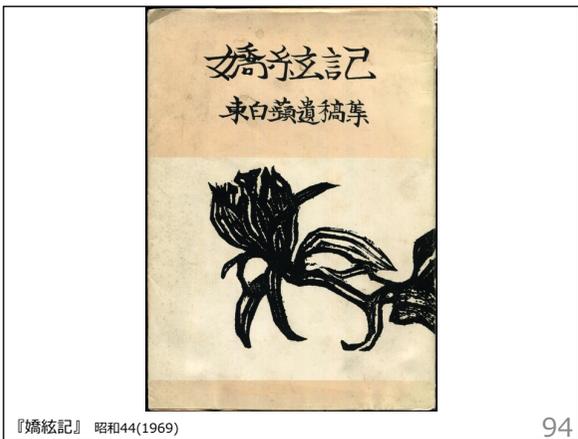
水戸磯節推奨会 (中村久治) 『いそぶし』 昭和7(1932)



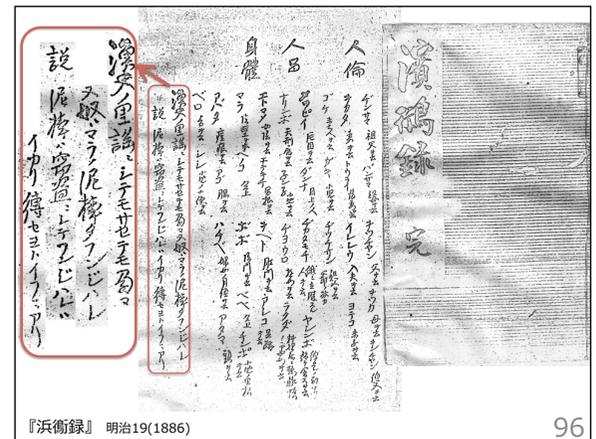
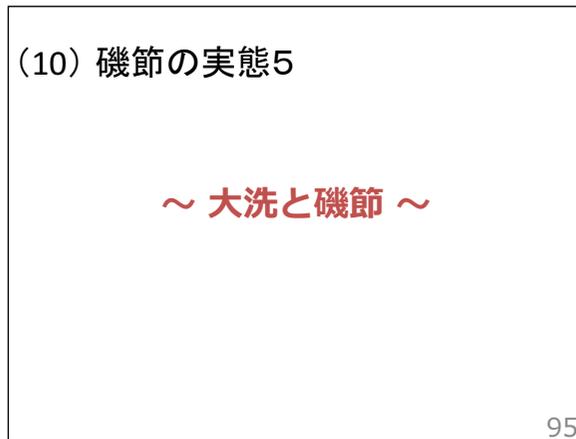
いはらき新聞社選定 本場磯節



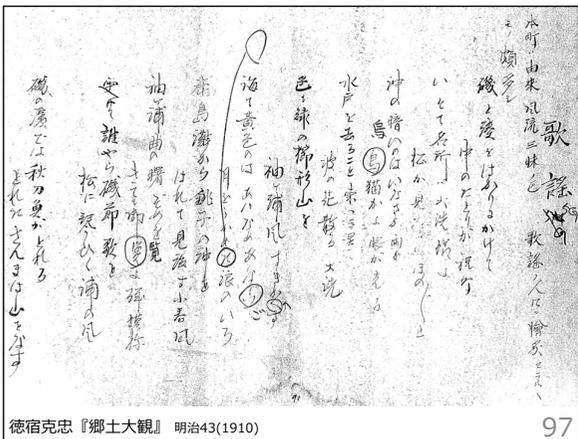
野口雨情の磯節 昭和10(1935)



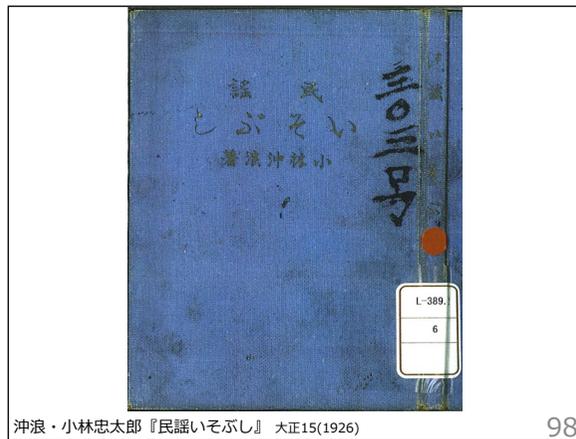
『嬌子記』 昭和44(1969)



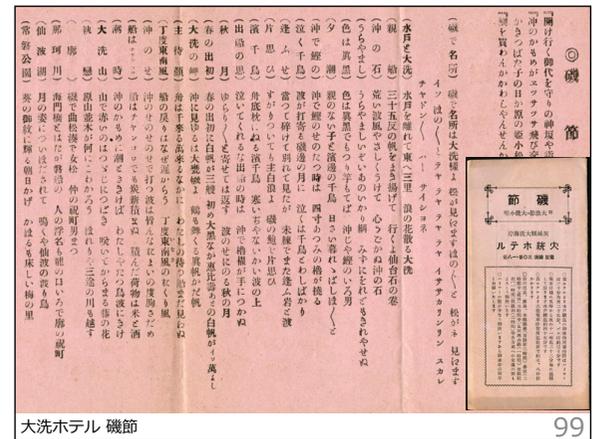
『濱衛録』 明治19(1886)



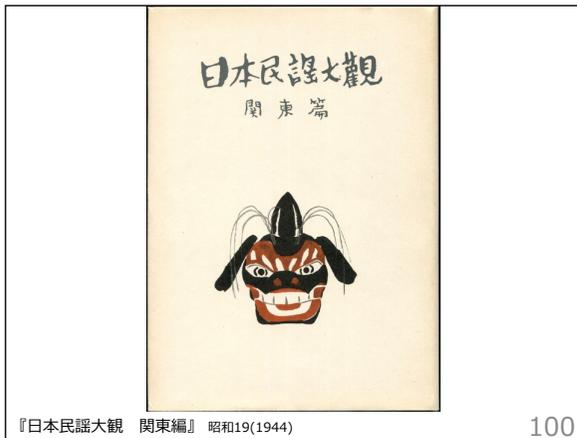
徳宿克忠『郷土大観』 明治43(1910)



沖浪・小林忠太郎『民謡いそぶし』 大正15(1926)



大洗ホテル 磯節



(11) 磯節の実態6

～ 磯節の戦後 ～

101



1 高度成長期 → 共同体の解体 → 個人中心の生活形態

(1) 漁業の機械化・大洗港の整備
漁船の陸への引き上げ → 岸壁への繋留
労働力の流出 → 漁業中心の生活共同体の変化

(2) 「三種の神器」
冷蔵庫 → 商店街の役割の変化
洗濯機 → 「井戸端」の消滅
TV → 「みんな」で見る → 戸別・個別に

(3) 銭湯 → 内風呂 → ①俚謡・③民謡の解体

2 花柳界の解体

3 流行歌の変化 (洋楽中心・節歌詞一体) → ①俗謡の解体

4 ②芸術としての磯節 のみが残った

104

(12) 普及上の問題と論者のアイデア

- 1 本歌のみを素歌で歌えるようにする(「返し」なし)。囃子や楽器などは極力使わない。
- 2 代表的な磯節(百編ほど)に関連画像や簡単な評釈を付けた読み物を作る(一般向け)。
- 3 教育用クイズ本を普及する。
- 4 町の認定する磯節の歌詞を選考する。
 - ① 明治大正昭和の伝統的な歌詞
 - ② 磯節として創作された作品のうち相応しい歌詞(コンクール)

105

